
W . I . T . C . H .

赤羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W・I・T・C・H・

【Nコード】

N0764B

【作者名】

赤羽

【あらすじ】

人にあらざる力を持つ者ウィッチ。彼らを襲うは力を恐れた全人類！彼らは何を想い生きるのか。そして彼らが見出だした生きる意味とは……。

く泣かないで

声が聞こえる。縋るような泣き声。見覚えのある黄昏れの街並みを背景に、その主はいた。

少女だった。闇夜を映したような青みを帯びた漆黒の長髪にフリルの付いた純白のワンピース。艶やかな綺麗な髪を風に預け、膝を抱えて少女は啜り泣いていた。母性本能というやつだろうか。その愛おしく切ない背中を見ていると胸が締め付けられる。

堪え切れずに少女の淋しげな肩にそっと手を伸ばす。だが、その手は肩に触れることなく少女の体を擦り抜けた。驚いて手を引っ込めるが、確かめるように再び少女に触れようと手を伸ばす。

髪に、肩に、背中に。だが何度試しても少女に触れることは出来なかった。少女は膝を抱いたまま動こうとしない。

どうしたの？

その瞬間、それに答えるかのように突然周りの風景が溶け始めた。まるで滲んだ絵の具のように黄昏は徐々にドス黒い漆黒へと姿を変えた。

綺麗なレンガ造りの街並みは瓦礫と化し、致る所で紅蓮が地面をはいずり回る。灼けた地面に転がる屍が辺り一面を死で包み、絶望を映したような真っ暗な闇夜が見据えるように沈黙を守る。少女の声だけを残して。

絶え間なく泣き続けていた少女は、突然の瓦礫が崩れる音にハッと顔を上げた。

涙で濡れたその瞳の先に写ったのは一人の少年の姿だった。少女と
同じ年くらいの茶髪の少年だった。少年の顔は灰で汚れていて、ボ
ロを羽織ったその姿はなんともみすばらしかった。フラフラと覚束
ない足取りで近付いてくる少年を少女は涙声で拒絶した。

「いや・・・来ないで。来ちゃダメ・・・来ないで！」

少女の叫びを遮るように鈍く光る鋭利な白銀の刃が少年目掛けて次
々地面を突き出て来た。徐々に迫り来る刃が意に介さないのか、少
年は顔色一つ変えずにフラフラと近寄る。

「ダメーッ！！」

思わず上げた叫び声が少女の叫びと重なったが、刃はその叫びもろ
とも少年の体を貫いた。ズグリと胸の悪くなるような肉が裂ける音
がしたかと思うと、おびただしい量の深紅の鮮血が辺りを血の海へ
と変えた。

いやああああ！！

今度は少女の悲痛に順じるかのようにゆっくりと刃が地中へと帰っ
て行く。刃が消えてなお鮮血は止まることなく吹き出し、少年の体
を紅く染め上げた。絶望に打ちのめされた少女はぺたんという足音
に思わず顔を上げた。一目で致死量と解る血を流したというのに少
年は平然とした顔で再び少女に歩み寄った。

ゆっくりと、だが確実に縮まる二人の距離が気に食わぬのか。今度
は少年の背後から現れた細身の槍が少年の心臓目掛けて穿たれた。
ズブズブと突き刺さる槍をもともせずひたすら少年は少女に近
づいた。

とうとう少年が少女の下へと辿り着くと槍も諦めたのか、血を滴らせながら刃と同じく土へと帰っていった。いつのまにか少女の涙は止まっていた。困惑した表情で見上げてくる少女を見て少年はニッコリと微笑んだ。

もう泣かないで

その一言が先程とは別の涙で少女の頬を濡らした。とめどなく流れ出る涙を少年の手が優しく拭う。いつの間に入れ代わったのか。地面にへたり込み涙を流していたのは少女ではなく自分だった。成長した少女の涙を拭い取っているのは少年ではなく優しい笑みを浮かべた青年だった。

「もう泣かないで。二度と君を一人にはしないから。だからもう大丈夫」

男の言葉に女性は泣き崩れた。男の腕が女性を優しく包む。泣き疲れたのか安心したのか、女性の意識は男の腕の中に堕ちて行った・・・

・・・ジル・・・おい・・・ジル・・・？

誰・・・？

優しく呼びかけてくる声に意識が夢から引きずりだされた。声の主

を探そうと涙で滲んだ瞳を開くと夢の中の男が自分の顔を覗き込んでいた。

「ジル？どうかしたのか？うなされてたみたいだけど」

心配した顔で男が濡れた顔を手で拭う。さっきの光景と同じだ。優しく触れる男の手を女性が両手で握る。女性は首を横に振るとニッコリ笑った。

「ううん。もう大丈夫」

く異端者く

「なあジル。お前言ったよな？人前で変化はしないって。俺の聞き間違いか？耳鼻科行つた方がいいか？」

「大丈夫よ。別にあなたの耳が腐ってる訳じゃないわ」

「ならもう一つ聞か」

眼鏡をかけた茶髪の男が綺麗な黒髪の女性と背中合わせでぼやいた。そんな彼らが対峙しているもの。ざっと見積もって百人はいるだろう。武器を握り締めた殺気丸出しの軍人が彼らを取り囲む。

「だつたらなんで昼間つから光り物向けられなきやいけないんだ！お陰で昼飯食い損ねたじゃないか！」

「文句ならこの人たちに言いなさいよ。私だつてランチの邪魔されただから！」

全く危機感の感じられない呑気な二人にとうとう軍人はキレた。姿は見えないが指揮官らしき男が兵たちの最後尾から怒鳴った。

「総員用意い！捕らえるおおお！」

掛け声と共に軍人どもが一斉に飛び掛かる。振りかぶった軍刀を女目掛けて振り下ろす。

キン、と乾いた金属音とともに火花が飛び散る。襲い掛かった兵は我が眼を疑った。こんな薄手で露出の多い服のど

ここに刃物など隠していたのか。いや、彼女は武器を出したわけではなかった。よく見れば女性の手首が鈍く光ってるではないか。そう、彼女の腕そのものが刃物と化してるのだ。あまりにも奇怪なこの有様に兵はたじろいだ。後退りする男の口から出た言葉は恐れに満ちた

「化け物」

だった。それに呼応するかのように兵たちは口々に同じ言葉を呟いた。無理もない。彼女の異形の腕は人のものと呼ぶにはあまりにも程遠い。

目の前に佇む恐怖にたじろぐ兵たちを指揮官が一喝する。

「怯むな！相手は化け物だ！奴らが在る限り我々に安息はない！殺せ！」

躊躇いながらも兵たちは何とか士気を上げ、再び彼らに飛び掛かる。

「言ってくれるわね。レディーの扱いがなってないんじゃないの？」

そう言うと今度は横薙ぎに振られた刀を回し蹴りで迎え撃つ。またしても刃と化した足首が襲い来る刀をへし折り、折れた切先を空高く舞上げた。息つく暇もなく突き付けられる刃を蹴りで、拳で叩き伏せる。これだけの人数を相手にできる並外れた反射神経と鉄刀すらへし折る瞬発力にそこらの雑兵ごときが敵うわけもなく、一人、また一人と膝を落としていく。もう手に負えないと悟ったのか。女性に向けられていた殺気は矛先を変え、男へと向けられた。

見れば男は体術で攻撃を遇うだけで、彼女のような変化は見られない。これはチャンスだと踏んだのか、今や兵たちの目には彼しか写っていないかった。

「ああああ！チキシヨウ！何でお前らこつち来るんだあ！そんなに俺を虐めて楽しいか！そんなに男がいいのか！このホモ野郎どもめ！飯の怨み、思い知りやがれえ！」

一人で勝手にキレてるヒステリックな男は振り下ろされた刀を左手で掴み打ち上げた掌底で叩き折った。

別に先の女のように腕が変化した訳ではない。折れた刀を握るその手はたたの肉付きのいい男性の腕にしか見えなかった。

有り得ない。素手で折ったのか？突き返された刀を見た兵はさらに驚いた。なにやら刀が白く霞んでいる。一瞬それが何なのか解らなかつたがすぐにその正体を理解した。

凍らされているのだ。それも打撃で折られるほどの超低温で。

体が刃物の女と冷気を操る男。果たしてこんな化け物じみた芸当の出来る存在を人と呼べるのか。彼らの出した答えはノーだ。勝てぬと分かつていても彼らの目に迷いはなかつた。

化け物め。異端者め。自分たちに危害を与えかねない存在を、人は決して許しはしない。少しでも違いがあれば徹底的に潰しに掛かるうとする。

人はそれを弱さと呼び、それを恥じ、隠そうと徒党を組む。そうしなければ生き残れないからだ。

この異能者たちもそうだ。捨て置けばいつか自分たちを危険に晒すかもしれない。自分自身を、愛する者を、大切な何かを護るため彼らは武器を取る。例えそれが勝てぬと判り切った相手であろうと。護るために闘う彼らの目に迷いはない。

男たちも分かっている。自分たちの力の強大さを。いくら嘆いたところで救いの手など有りはしないということも。だからこそ譲れな

いのだ。

一人一人が想い、考えるこの争いに終わりなどあるのだろうか。強さ故の過ち、弱さ故の後悔。答えの出ぬまま犠牲は積もる。答えを求めた人の声が、また一つ消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0764b/>

W . I . T . C . H .

2010年10月10日04時15分発行